谷田山東光寺坐禅会　　令和６年６月９日

非思量　ＮＯ．３６１

本堂が木造の理由　その１

法幢寺秋田老師の法話から

今年の春彼岸会では長沼法幢寺の秋田弘隆老師に木造本堂の意味についてお話頂きました。そのお話を今回から数回に分けて紹介させていただきます。

皆さん、この本堂が木造で建てられた理由が分かりますか。

日本は何千年の間、木で神社仏閣を造ってきました。つい最近ですよ鉄筋コンクリート造、鉄骨造というのは。古来、神社仏閣は木というのは決まっていました。その理由は湿気です。まずは湿気対策。やはり梅雨時はものすごく雨が降りますし、この木というのは自然の湿度調整装置になっているのです。実はうちの法幢寺の本堂は昭和４２年に一度建て替えています。その時には鉄筋コンクリート造でした。昭和４０年代っていうのは鉄筋コンクリート造が非常に流行りました。なぜかというと静岡は一度、静岡大火で焼けました。その後、戦争でまた焼けました。二度の大きな火災で多くのお寺さんも焼けました。それで焼けないお堂を作ろうということで鉄筋コンクリート造の本堂が流行ったのです。実はうちのお寺だけでなくこの時期多くのお寺さんが鉄筋コンクリート造の本堂に建て替えました。ところが私もずっと鉄筋コンクリート造のお堂に住んでいたので経験があるのですが６月になって梅雨時になると丸柱に水滴がいっぱい付着します。それなので柱の下に雑巾でも置かないとビシャビシャになってしまいます。結露するんです。その時、鉄筋コンクリート造はダメだなと思いました。そして、いろいろ建築について勉強したり研究したりして、やはり木造建築が日本の風土に一番合っていると確信しました。

この木というのは結露しないでしょ。湿気が多いときは吸ってくれるんですよ。皆さんのお宅も多分、木だと吸ってくれていると思います。木は呼吸をしています。それなので秋の乾燥した時期には木は湿気を吐き出してくれます。だから自然の湿度調整ができるすごい優れものなんですよ。だから法隆寺や正倉院は１２００年もの長い間、木で保っています。正倉院は校倉造りと言って、三角形の木を組んで造ってあるのですが、あれは湿度が高い時には閉まって乾燥すると開くようになっています。現在も宝物がいっぱい保存されていますけど、そのような造りだから保存可能になるんですよね。

そういうことで、木というのは本当に素晴らしいものです。ただ一つね、火災が心配ですよね。ですから、十分火には気をつけていただきたいと思います。

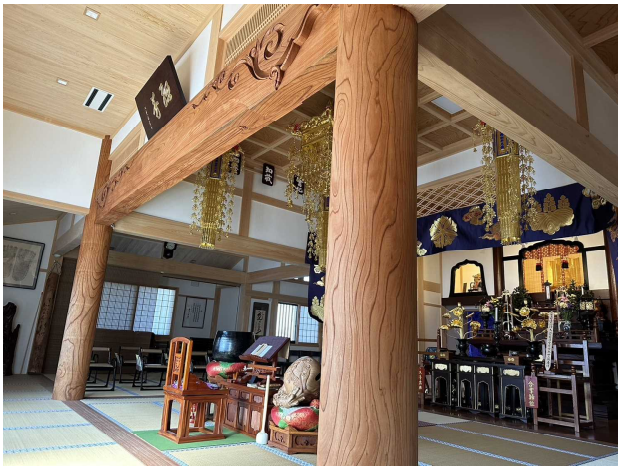
それともう一つは、東洋思想の根幹にありますこの宇宙と一体になって生きるということです。それを『天人合一』と言います。この言葉知っていらっしゃいますか。天と人は宇宙と一体になって大自然と一体になって生きるということです。例えば、天地人という言葉があります。大河ドラマのタイトルにもなりましたが、天地人、天と地の間に人は住むと幸せですよという言葉がありまして、自然、大自然と調和して生きるという考え方が東洋思想の根幹にあります。

仏教伝来する前から日本には古神道というのがありました。それはすべてのものに神が宿るという思想です。木にも、山にも、水にも木魚にも鐘にも皆さんの魂にも、すべてに神様が宿るという思想です。八百万の神っていましたけど、そうやって天に向かって、また内神様（うちがみさま）という自分の心魂に向かって常に祈り、大自然の一つになるという考え方です。

実はこの丸柱これがその役目をしております。神社仏閣にはなぜこんな太い丸柱があると思いますか。古くは縄文時代からあります。皆さん、三内丸山遺跡をご存知ですか。青森県にあるもう巨木の栗の木を組んで作った遺跡ですけどもあの遺跡もそうです。他にも伊勢神宮の式年遷宮なんて２０年に一度何をしていると思いますか。実は柱を動かしています。また、信州の諏訪大社をご存じですね。あそこは御柱祭っていうのがあります。よくテレビの映像なんかで。巨木を山から切り出してそこに乗って命がけで山を下っていくというお祭です。

それらは天地のエネルギーをつなぐという役目があります。天のエネルギー 、地のエネルギー、これを皆さんのお宅にも取り込んだのが大黒柱です。昔は一階と二階を繋ぐドーンと太い柱が床の間にあったり家の中心にあったりしたわけです。現代はチョキーンと切られたり化粧板になっちゃったりして大黒柱自体がなくなっていることが多いですけど、神社仏閣は今なおその伝統を引き継いでいるわけです。

なぜかと言ったら天のエネルギー地のエネルギーを得ることによって、この場所を最高の氣場（きば）にするんです。気場、元気の気の場、今の言葉で言えばパワースポットですね。その中に住むと人々は健康で健やかに元気で生きていけますという先人たちの知恵なんですよね。



東光寺の丸柱